



翠巒 Mini Press 第169号 2020/10/29 編集・発行 高崎高校新聞部

定期戦5連覇

3タテ競技インタビュー

第74回高前定期戦では、高高が9月10日の一般水泳で14年ぶりの3タテを成し遂げた。本戦の一般バレーボールでも、1・2年は全チームが勝利し、3年は2勝1敗で勝ち越し、3タテを果たした。そこで、各班を率いた生徒に話を聞いた。

水泳

一般水泳での3タテは高高を沸かせ、定期戦全体の勝利に大いに貢献した。そこで、水泳部での経験を生かして練習を取り切った大串知寛くん(3の5)と、水泳班のチーフとして勝利へ導いた江村隼風くん(3の7)に取材した。

まず大串くんは、「短期間での勝負なので、選手の負担を考慮して最低限の技術を身につけるようにアドバイスをした。また、効率的な練習をしてみようというために、メニュー構成に力を入れた」と練習での現状を見極めた工夫を述べた。その上で、「試合前の練習で前高には緊張感があった。その中でも、選手たちが圧倒されずに自信を持って戦ったため、勝つことができたと思う」と熱戦を振り返った。

次に江村くんは、「現3年がいなくなると、1勝はできるといふ安心感がなくなってしまう。そこで、力をつけるために僕の代が全力で引継ぎをしたと思うので、ぜひとも有効活用して来年の勝利に繋げて欲しい。水泳は前高のお家芸のようになっているが、その流れを変えるには今しか

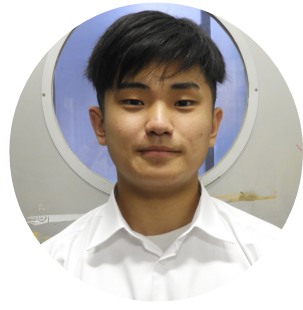
バレーボール

今回はバレーボールの実行委員であり、練習の指揮監督をした有田真人くん(2の1)に取材を行なった。

3タテできた感想については、「ただ3タテするだけでなく、2年生の全チームが1セットも落とさずに、完全勝利できたので、とてもうれしかった。1年生も全チーム勝つことができたので、来年も前高に勝てると思う」と語った。

生徒会長インタビュー

これから目指す場所



生徒会長の追川くん

今回、生徒会長に就任して3ヶ月が経った追川真純くん(2の7)にインタビューを行なった。生徒会長は、今の心境を熱く語った。

きつかけは、高校では部活や委員会に入っていないだったので、中学校で生徒会長をした経験を生かし、生徒会長をしようと思ったことだ。また、生徒会の先輩から勧められたことも大きな要因の一つだ。

「これから積極的に行ないたい事業は、理科棟の美化と学校行事の運営だ。特に、後者は新型コロナウイルスの影響で、例年通り行なえなくなっている。

「生徒会長になろうと思った

これからも、感染症対策に細心の注意を払い、行事の質を落とさないように運営していきたい。

「生徒会長になって大変だったことは、他校とのコミュニケーションである。今までそのような経験がなかったので、最初はとても戸惑った。

「生徒会長になってよかったことは、全校生徒に自分の名前を知ってもらえたことだ。

「最後に、全校生徒に一言。僕は、多くの人とコミュニケーションをとって、一緒に学校を作っていきたい。困っていることがあったら、ぜひ気軽に相談してほしい。よろしくお願ひします。(中澤)

ビブリオバトル

吉野くん制す



チャンプ本を持つ吉野くん

10月7日に本校図書館でビブリオバトルが行なわれ、4人の参加者が本の魅力を各々語った。個性溢れる本の中で、「medium 霊媒探偵城塚翡翠(相沢沙呼、講談社)」がチャンプ本に輝いた。

ビブリオバトルでは、バトルと呼ばれる競技者がそれぞれ持ち寄った本を紹介する。その後、オーディエンスが、その中で一番読みたいと思っただ本に投票し、最も得票数の多い「チャンプ本」を決める。チャンプ本を紹介した吉野貴翔くん(1の1)は「好き

な本の感想を共有する人がもつと欲しかったので、ビブリオバトルに参加しようと思った。優勝して本が認められて、純粹にうれしかったのと同時に、本の感想を共有できる人が増えそうという期待を抱いている」と優勝した心境を口にした。

さらに、「原稿をほとんど用意しておらず、溢れてくる本の素晴らしさをそのまま口にした。思いを変に修飾せずにストレートに伝わるようにした」と続けた。最後にチャンプ本の魅力について、「全てが伏線。気づかないうちにたくさん仕掛けられていて、ラストで一気に回収する。圧倒されてしばらく動けなくなってしまう」と語った。

吉野くんは11月7日に群馬県立図書館で開催される県大会に出場する。(小松)

NOTE

「エンタメ」と聞いて、何を思い浮かべるだろうか。テレビ番組、アーティストや笑い芸人のライブなど様々あるが、ここ数ヶ月の間、新型コロナウイルスの影響で活動が制約され、それらは変化を迫られている。一方で、そのような影響をあまり受けることなくエンタメを提供しているのが「ラジオ」だ。▼ラジオと聞くとどこか古いイメージを持つかもしれない。しかし、最近になって若い世代からラジオが注目されつつある▼その要因として考えられるのが、スマートフォン向けラジオ配信アプリの普及だ。その代表例が、2010年からサービスを開始している「radio ko」である。その他にも、各局が独自のポッドキャストアプリやクラウドを利用してサービスを展開している。このように、ラジオに触れる機会が以前よりも多くなり、親しみやすさが増したことで、ラジオの虜になる人が続出しているのだ。▼ラジオには様々な楽しみ方がある。勉強をしながらかき流すこともでき、じっくりと聴いてメールやハガキを通したリスナーとパーソナリティーのやりとりを、作家のように俯瞰して眺めるのも面白い。SNS上で色々な人と感想をやりとりすれば、新たな発見ができるかもしれない。きっと自分に合った番組や楽しみ方が見つかるはずだ。▼毎日忙しい高校生だからこそ、リラックスしたくなるときには、少しだけラジオに耳を傾けてみるのもよいのではないだろうか。(都木)

県大会制す

軟式野球部 関東大会へ



キャプテンの田村くん

今回の秋季大会では高崎軟式野球部が群馬県大会にて優勝を果たし、関東大会出場の切符を手に入れた。準決勝は10月13日に両試合とも高崎市城南野球場で行なわれた。優勝に伴い、キャプテンの田村裕也くん(2の2)に話を聞いた。

「最初に、県大会で優勝した感想は、素直にうれしい。何かで一番になるといえるのは中々得ることができない経験なので、1つの良い思い出として記憶

に残したい。準決勝、決勝とどちらのよう試合の運びとなったか。

準決勝は非常に手に汗握る試合運びになった。相手は、県立前橋南高校、県立前橋商業高校、県立高崎工業高校の3校連合チームだった。守備では、初回から満塁のピンチを迎えたが、ピッチャーの好投もあり0点で抑えることができた。攻撃では、自分たちが夏休みから練習を続けていたストライクエンドランで点を取ることができたので、練習の成果を実感することができた。

決勝の相手は、夏休みに定期戦の前哨戦で対戦した県立前橋高校であった。こちらも準決勝と同じく、ストライクエンドランで着実に得点することができた。前高には点を取られてしまったものの、取

「働き方改革」などで社員の労働形態が変わりつつある現在、その改革の波は教育の場にも迫っている。問題となっているのは、公立の小中学校と高校の教職員の長時間労働だ。特に休日の部活動を監督し、休日が無くなってしまうことが問題視されている。

文部科学省は9月、改革方針として、「部活動の地域移行」を主とする案を取りまとめた。その案というのは、

「2023年度以降、休日の部活動を段階的に地域に移行し、休日の指導を希望する教師は、兼職、兼業の許可を得た上で従事」というものだ。方針によると、各都道府県のモデル校で随時実証実験が開始されると

「部活動の地域移行」というのは、休日に部活動をする際、顧問の教師が指導監督するのではなく、各地域の民間団体に任せることだ。民間団体には、保護者や専門の人間

べでの公立小中学校と高校を対象に適用されるとなると、指導者や練習場所の不足が考えられる。2つ目は、平日と休日の差だ。この方針案は、休日の部活動に対して提示されたものため、適用されると平日と休日

「部活の地域移行」

どう捉えるか

が組織するものや、地域のスポーツクラブなど様々な形がある。ただ、「部活動の地域移行」については様々な問題が付きまとう。1つ目は、指導者、指導場所の確保だ。地域の団体もそう多くはないことに加えて、す

このように、まだまだ課題が多いが、地域との協力や学校同士での配慮があれば「部活動の地域移行」が実現できるかもしれない。そうなれば、教職員の長時間労働の解消につながるだろう。(鈴木)

られ方は決して悪いものではなかった。その後は相手の攻撃を1点で抑えることができたのでよかった。定期戦での大勝は、偶然の産物ではなかったことを証明できたのだと思う。

「最後に、関東大会への意気込みを。」

(新井)

夏季大会団体3位

ソフトテニス部



練習に臨むテニス部員

群馬県高等学校夏季ソフトテニス大会の団体戦が8月19日に上野庭球場で、個人戦

が8月20、21日にALSOKぐんま総合スポーツセンターで行なわれた。団体戦では3位という結果を残し、個人戦では、1ペアがベスト8、3ペアがベスト32を達成した。大会後、部長の大塚岳くん(2の3)にインタビューをした。

「今後の練習について。正直、考えれば考えるほど練習時間が少ないと感じる。さらに、これからの季節は日が沈むのが早くなるので、効率よく練習できるように工夫していきたい。また、練習試合など実戦経験が積める機会も大切にしたい。」

「高ソフトテニス部が最終的に目指すのは、団体戦でインターハイ出場することだ。(五十嵐)」

準優勝 シールド獲得

空手道部 練習の成果発揮



打ち合いを見せる2人

9月25日にALSOKぐんま武道館で空手道の県高校1・2年生実戦研修会が行なわれた。本校から4人が出場し、磯田蓮くん(1の2)が組み手55キロ以下級で、渡辺悠太くん(1の4)が組み手76キロ以上級で、それぞれ準優勝を果たした。2人は10月末に開催される県高校新人大会(以下、新人戦)当該種目第2シールドを獲得した。

空手道の種目には、決まった形をどれだけ切れよく、力強く、美しくできるかを競う「形競技」と、2分間相手と

また、渡辺くんは、「2日前に怪我をしてしまったが、善戦できた。しかし、自分の全力を発揮できなかったのが悔しい」と語った。新人戦に向けて、磯田くんは、「今回判明した反省点を踏まえて、大会までに自分の得意技である蹴りを仕上げたい。以前よりも練習量を増やすとともに、楽しんで取り組むようにしたい」と意気込んでいる。渡辺くんは、「まずは怪我を治して万全の状態で大大会に臨み、高高校のために戦いたい」と話した。最後に、空手道部部長の石田悠くん(2の1)は、「1年生2人が、準優勝したのは素直にうれしい。新人戦に向けて、学業と両立しながら練習に励みたい。個人戦は一人一人が全力を尽くし、団体戦では確実に1勝する」と展望を述べた。(茂木)